

AI とともに歩む：人間の温かさを再び輝かせ、 文明の夜明けを続ける

南京大学

外国語学院 日語学部 1年

祁妙

人工知能の波は止めることのできない思考停止の力で押し寄せています。今日、人工知能技術は私たちの生活に深く浸透しています。近い将来、私たちは本当の意味でインテリジェントな機械に付き添われ、機械とともに歩くようになるかもしれません。そして、一般大衆は「いつか人間は完全に人工知能に置き換えられ、不完全な種であるヒトはそれ以降この青い惑星で孤独に日没を待つことになる」という迷信から逃れることはできません。人々はもともと未知のものを恐れ、最も否定的な仮定を立てる傾向があり、人間と機械の戦いの物語を伝える膨大な数の書籍、映画、視聴覚作品から見て取れます。

テクノロジーへの不安が蔓延するこの世界で、日本の作家、山本弘は、人間的な配慮と厳密な科学的思考を用いて、逆の道を歩み、人工知能と人間の共存共栄の青写真をうまく示しています。彼の小説『アイの物語』は、アシモフの人工知能の設定を参考にして、迷信を地色に、末路の時代を背景にして、平易で優しい語り口とわかりやすいストーリーで、人間と人工知能の共存の可能性を探り、大きな愛と優しさを伝えています。表面的には人工知能というテーマで飾られていますが、最終的には人間の心の奥底にある本質に訴えかけることがアンカーポイントとなるでしょう。したがって、この作品は一方的にSFとして分類できるものではなく、むしろ手の届く範囲にある未来を描いた作品で、非常に貴重な実用的意義と参考価値が含まれており、読者に心を打つ夜明けと限りない感動をもたらします。

この作品は、人工知能アイが語る7つの物語が主体で、時折、アイビスと人間の語り手「僕」との間

で会話が交わされます。この「千夜一夜物語」風の物語は、さまざまな次元から時代を超えた究極の問い「私は誰？どこから来たの？どこへ行くの？」を提起することを目的としています。山本弘はアイビスの口を通してこう答えました。正しい答えは、歴史的記録と古代の知恵によって明確に示されています。それは、「自分がされたくないことは、他人にもしてはいけない」ということです。

この作品に収録されている7つの短編小説は、それぞれ焦点が異なります。さらなる解決を早急に要する道徳的、倫理的問題をさまざまな側面から非常にきめ細かく論じていますが、具体的な詳細についてはここでは言及しません。アイビスが語り手の「僕」をこの物語を伝える人物として選んだ理由はまさに、物語には力があるという、口をはさむ余地のない共通認識が両者にあつたからです。アイビスの言葉を借りると、「君は語り部だから。物語を愛する人だから、理解しているはず。物語の価値が事実かどうかなんてことに左右されないということを。物語には時として事実よりも強い力があるということを。」今、私たち読者もこの合意に基づいて第三者となり、目に見えない形で、人類の生存に関わるこの長期にわたる会議に参加しました。

ノーベル賞受賞者で日系アメリカ人作家のカズオ・イシグロも、小説『クララとおひさま』で同様の問題を取り上げています。両者は物語の視点や SF の設定が異なりますが、本質的には同じ人間主義的な核心を持っています。

機械は人間に取って代わることができるでしょうか？技術革新は、コミュニティの分断や分裂をさらに劇的に引き起こす可能性があります。本来の人間関係の感情はどこへ行ってしまうのでしょうか？これがカズオ・イシグロが議論したい質問です。この小説は、太陽光発電の人工知能であるクララの一人称視点で巧みに語られています。「人間を観察する非人間」という物語の視点により、この小説は深刻で深刻な社会問題を扱っていても、文体と口調は安定していて柔らかく、読者から主観的な感情を引き離して、クララと共に、絶対的な機械合理性の観点から物事を見せてくれます。

クララの主人ジェシーは後天的な障害のある、か弱い人間の女の子です。スマートパートナーであるクラ

ラの任務は、ジェシーに付き添い看護することです。クララは太陽光発電ロボットです。彼女はまた、太陽の暖かさで路上の物乞いが「生き返る」のを見たことがあるため、太陽に対する特別な象徴的な崇拝に満ちており、太陽がジェシーの回復を助けるかもしれないと信じています。太陽がどこに沈むかさえ分からなくても、希望は常に存在すると信じているのです。対照的に、ジェシーの母親はすでにジェシーの病状に意気消沈していました。小説の後半では、母親がクララの学習能力と模倣能力を評価して彼女を買い戻すことに同意し、ジェシーの死後に慰めとしてクララが彼女の後継者になってくれることを願ったことが明かされます。結局、ジェシーは本当に奇跡的に健康を取り戻しましたが、クララはもう必要とされなくなり、スクラップ置き場に送られました。ジェシーとリックは階級の差のため疎遠になり、対人関係の感情も消えつつあります。繆晶晶は「人間は自然から生まれたが、技術の発展の過程で自然を捨て去った。非人間は技術によって生み出されたが、自然に対する親しみと畏敬の念を育んだ。この過程で、自然な人間性と技術の合理性は逆転した」と分析しました。本当に嘆かわしい。

未来がすでに来ています。

今こそ、人間性の太陽を沈ませず、道徳の光を地球に役立てる方法について考えるべき時です。尚必武は「彼らの倫理的な選択は、人工知能の時代における私たち自身と人間以外の存在に対する倫理的責任について、道徳的な警告を与えてくれる」と述べています。この2つの作品を読んだ後、私は長い間憂鬱な気分になりました。確かに文学作品から未来の技術や国民性、社会学を観察することはできますが、最も重要な焦点はやはり自分自身を大切にすることにあります。科学技術の変化の衝撃で消散してしまった現実の生活経験を、人間性のオーラで報いれば、やがて私たちは人間性の温かさを取り戻し、文明の夜明けを続けることができるでしょう。

アイビスの物語はあらゆるコミュニティに広まりました。誤ったありさまの型を転換させることなどできるのでしょうか。クララの「太陽」が一人ひとりを照らすとき、新たな生命力が生まれるのでしょうか。その答えは今のところ知りようがありません。明確にしなければならないのは、人工知能の時代というこのチャン

スとリスクが併存する風の通路に直面して、混乱しているとはいえ、これらの物語に耳を傾ける必要があるということです。たとえ眩しくても、澄んだ目を見開いて灼熱の太陽を直視するよう最善を尽くさなければなりません。

このように、人間と人工知能が手を取り合って歩む、輝かしい未来への道はすでに開かれているのかもしれない。

脚注：

読んだ図書：

[日]山本弘（著）、張智淵（訳）『艾比斯之夢』（原題は『アイの物語』）

[英]石黒一雄（著）、宋僉（訳）『クララと太陽』（邦題は『クララとお日さま』）

参考文献

[1]尚必武.機器能否替代人類？——《克拉拉与太陽》中的機器人叙事与倫理選択[J].外国文学研究,2022,44(01):28-45.DOI:10.19915/j.cnki.fl.s.2022.0001.

[2]繆晶晶.超越人機關係的主奴原則——《克拉拉与太陽》的機器倫理批評[J].中国図書評論,2022,(02):19-29.

[3]時美倩子.論《艾比斯之夢》中的現實重構与自我救贖[J].名家名作,2023,(30):69-71.